

一杯のコービーから三絃の誘惑へ

西松 布咏

又しく本棚に手を伸ばすゆとりがないまま時を過ごしてきた私の目には、ふと樋口寛の【三絃の誘惑】の文字がとまった。

私の稽古場は白金台の片隅にある小さなビルの一階にある。その一階の妹がひとりで開いている小さな喫茶店【たより】の【樹】はかわつた十年になり、一杯のコービーとたわいないお喋りを楽しみに訪れる常連客もいらつた。

「わたしは三味線は弾けないけれど毎日コービー豆を挽いています」「言葉に初きの紳士が「三味線は弾けないほうがいいんだよ」と答へられたという。三味線を生業にしている姉を持つ妹は、不思議に思い「なぜですか」「人間への器用な弾典のコービーを持ってきて下さいました。」

三味線を弾く三味線を歌い手に合わせて弾くことから相手の言うことに調子を合わせて応対したりあらゆることを言いつつある。

六歳で三味線との出逢いが一生を決めてしまった私がおそれを知らなかったことは、あまりの認識不足でありしばらくはそのことが脳裏を離れず、ふと三味線について本のページをめぐるようになった。

三味線の起源は諸説あるが、中国から琉球に伝わった蛇皮二弦が永禄年間に大阪堺港から伝来し、時を同じくして邪教と言われたキリスト教も布教されてゆく。爾来日本を代表していた琵琶や琴をしのいで様々なジャンルに分かれてゆき十七世紀初頭には「古浄瑠璃」が盛んになって行くが、元禄時代になり赤穂浪士討ち入りの頃から士農工商といった封建制度が徐々に崩れてゆく。

戸の浄瑠璃は武家好みで詞も節も諷めるような強さがあったのに、上方のやんわりとした浄瑠璃が巷に徘徊するや、世に多くある淫楽のなかでも糸竹では三絃、歌では浄瑠璃ほど淫声のものはない」と儒者太宰春台や荻生徂徠が危惧したように、和・恋・節を大事とする儒教的志向からの音楽も変わってゆく。しかし情緒連続とした間合いの豊後節が盛んになるにつれ、なごめ仲の男女の心中事件が勃発し「この世の名残り、夜も名残り：」と近松門左衛門の【音根崎心中】に唄われるほど時はますます厭世的に享樂的になって行く。このように三味線の音色は江戸時代にあつては異教徒の布教と同じように世相を感ずる淫声と捉えられていったのだらう。幕府はやっきとなって禁止令を下したけれど【遊里】においては遊女が三味線を携えて客の相手をするようになり、江戸の歌舞音曲は男を骨抜きにする悪所といわれる廓ぬきには語れなくなつてゆく。

私が好んで唄う「歌沢・玉川」の一節「思い出さず忘れずに又来る春を待つさえ」とあるが、これは一世を風靡した高尾太夫の「忘れねば思い出さず候」と客へ宛てた玉草のひとつである。薄曇色の流麗な筆致で相手の不義理をなぐるでもなくそれとなく心の内を明かす太夫の奥ゆかしさは男を打ちまちひきつけ、本居宣長の言「ものあはれ」を引き出つてゆく。時が流れても日常の今を忘れさせておぼろげの、永遠の想いを三味線と唄は付かず離れずの絶妙の間合いで紡ぎだしてゆく。

その危うさが三味線のあの由来となつていったのだらう。

このように三味線唄の変遷をあらためて紐解いてみたが、私には三味線を弾くことが適当に相手に合わせることはどうもつながらつてゆかない。思い返せば私はそのことのために多くの時間を費やしてきた。

まず洋楽に耳慣れた時代に育った私が邦楽の【間】と格闘するようになる。思い余った中学時代、メトロノームを買って欲しいと懇願したところ、父は「モノに頼らないで自分の動で把握しなさい」と応じてくれなかった。年齢を重ねる頃になつてようやく判ってきたことは【間】は理論と語らぬものはなく割り切れない思いが消

えてゆくまで肉なる心に耳を傾けること。それには自分が無になれるまで繰返し稽古をし、相手の言葉や音を掬い上げるゆとりや思いやりを持つこと。

これはもともと日本人の本質であり心の在りようであつたはずだが世界の中の日本を考へる明治維新以降から音楽も人間も自己主張がより大切との風潮から認められなくなつていったような気がする。

五月に新設したホームページにも記したが、私の歩んできた道は三味線と共に心と心を繋ぐ虹の架け橋を心がけて来たが、それは遠いほのかな道のりだつた。心が揺れるとすぐに調子が狂い音が乱れてゆく不安定な楽器である三味線。しかし思い感ずる時は素直な心で古人の望徳の声に耳を澄ませると想像の世界が様々なひろがってゆく。

その思つと三絃に誘惑されたわが人生も果てなく深くなつてゆくような気がする。

これからの糸は静寂で白く三日目のように夜空にかすかに浮かぶ【月虹】でありたい。稀にしか見えないかすかな夜の虹だけれどそれを見だものは空から神様が幸せを運んでくると伝説にある。

やはり迷わず三味線を弾き続けたいと思つた。

胸を展(ひら)く

小野原 教子

西松布咏さんから、ウェブサイトをリニューアルしたという連絡をまひつ。こぼれ話の「たより」のアーカイブを読んでみると、第五十二号に、わたしの新刊詩集『刺繍の呼吸』(二〇〇九、深夜叢書社)の関元ともいうべき作品「呼吸の刺繍」を見つけた。この作品は、布咏さんが尺八の中村明一さんと舞の古澤信幸さんとで催された演奏会「玄・へる」を体験して、書きおろしたものだ。すっかり、忘れていた。

あれは二〇〇五年九月のこと、わたしは開演前ぎりぎりついたので、大きな能楽堂の一番高いところ一番後ろにある畳敷きのスペースの、一番左端になんとか座つた。座布団も置けないくらい狭いスペースに身を置いた。呼吸が整わないまま、薄暗いステージの、遠くにある

ほのかな明かりをぼーっと見ていたが、中村明一さんの尺八が始まると、わたしのなかの呼吸する器官（胸なのか腹なのか背なのか）のどこかが、音と一緒に動いて、胸が展いていくーという体験をした。それは、正しくいえば「音を聞く」というよりも、「音を触る」、息である空気の流れとリズムがわたしの内側に伝わってくる、という体験だった。布咏さんの唄（声と言葉）がそこに描かれていくようで、わたしはそれを「呼吸の刺繍」と名付けた。

ステージから遠く離れている。呼吸はもちろん見えない。闇のなか蜻蛉のように細くてやわらかな白い線が湧くように舞っている。それは三味線の弦の動きが描く線画のようでもある。古澤さんの舞の摺り足の重たさ（平たさ）でもある。

はじめての感覚、この呼吸の呼吸の動きについての体験を、演奏会のおとの打ち上げの場所であつたしは布咏さんや中村さんに興奮して話した。（程なくして中村さんは『密息で身体が変わる』（二〇〇六、新潮社）という本を刊行される。あときの謎が解かれるとわたしもすく手にとり拝読したが、実際の体験ー遠いところにあるはずの見えない息が音を介してわたしの体と共鳴していくーの方がわたしには強烈だった）

拙詩集『刺繍の呼吸』に関連してこぼれ話を最後にもうひとつ。今回の布咏さんのメールには「アユタヤの蜻蛉」というわたしの作品を再演するというのも書かれていた。この詩は当初『刺繍の呼吸』の一番最初に置いた作品「黄色のモノクルの裏ヴァージョン」である。二〇〇五年夏、高熱でアユタヤに行く予定をキャンセルしたとき、その古い都を思い、書いた一部を残書見舞いの葉書の文面に添えた小さな詩。布咏さんがそれを気に入ってくださり、唄ってみたいとおっしゃってくださった。うれしかった。もう四年も前のことだったのだ。

「やっとできたわ」と曲をつけたことを布咏さんが連絡くださった時、詩集は発行直前で、わたし

は最終その作品を本からカットすることに決めた。詩の蜻蛉はこうして浮かびあがった。

耳福なライブとはー『ポエムな邦楽の夕』

ヤリタ ミサコ

どんなに上質なステータスもどんなに凝ったアイスクリームも、それぞれおいしく味わえる分量のサイズがある。音楽にしても、キヨシローやストーンズをかすかな音量で聞くなんてことは考えられない。

この日の唄に登場した女たちの情感にも、タイナミックな大きさのサイズがある。「檐のお七」では、お七自身が存在する全世界と吉三をはかりにかけた結果だから、放火した江戸の町の大火、つまり全世界サイズの恋心。「摩利支子の唄」のオーガスムは、男性詩人レクスロスが女性の声になって作った詩ゆえ、両性固有の、つまり男女二人分のオーガスムであるから二人分のサイズだ。「晴れて雲間」では、月と雷の背景は、二人の恋の背景と効果音になっているところが面白い。自然現象さえも遠景で小さく見える。五月二十三日の平塚メイソプロスターでの『ポエムな邦楽の夕』では、いろいろな女たちの心情が表現された。詩ではヤリタミサコが新国誠一の「オ・ン・ナ」という音声詩、自作「私は母を産まなかった」、白石かずこの「死んだジョン・コルトレーンに捧げる」を朗読。西松布咏さんは、端唄「夕暮れ」から始まって「ブルー」まで十二曲を唄い演奏した。

この夕の耳福は、布咏さんが完全アコースティックだったこと。三味線のナマの音の表情や布咏さんの息が天上に昇る気流を、直接肌や耳に感じられる、その至福。マイクやアンプを通さないナマオトを聞き手全員が自分の身体で感得できるその快感。温の気を帯びた布咏さんの声が、自分の耳も心に届けられている。

三味線のように生きていく楽器（綱や皮や木はすべて天然素材のため温度や湿度で変化するのは演奏者の体を通して、その場の空気を共有する聞き手の体に響きこんでくる。三味線と唄は室内楽だから、ライブのサイズは、おそろしく聞き手が「自分に唄ってもらった」と思える範囲なのだろう。その意味では、この日はみんなが自分の耳を、楽しく

心地よく持ち帰ることができた、よい会だった。

布咏さんの体全体が共鳴して上の方へ登っていく声の余韻がすばらしい。息をすっと吸うときの背筋が美しいと、聞き手がしみじみ語っていた。繊細で豊かな表現によって、描かれている情景の風や光、温度、女の心情が切々と伝わってくる。

会場の響きがよく、短編小説を次々に読んで行くようなワクワク感、いろいろな女の姿が見えては去っていったホロン、ヤリタミサコ、ジョン・ソルトらの映像も解釈を助け、マルチプルなアートであり、かつ人間サイズの唄の世界だった。

布咏さんの解説も興味深く、「アユタヤの蜻蛉」（小野原教子作詞）は、吉三がアユタヤで托鉢僧になってお七の霊を守っている姿かもしれない、と想像できること。シユールなのではなくて、情念や哀惜の念は時代も地理も越えて存在するということだ。お七の思いが吉三につながり、唄い手の思いが聞き手の心に届く。時空を超えてゆらめく情熱が、心に響く。聞き手一人一人に届けられた耳福だった。

『ポエムな邦楽の夕』感想

野村 わかな

西松布咏さんの唄と三味線は、五月の宵の、海からの湿気を含んだ空気を震わせて、心にしみ入るようでした。邦楽に馴染みのない私には、新鮮で奥深い体験でした。会場



は小ぢんまりしたレストラン、お客様は三十人前後。小さな舞台上に正座された布咏さんは、手を伸ばせば届きそうな距離。マイクやスピーカーは使わず、生音で。お一人の唄と三味線の調べに耳を傾けるのに、これ以上贅沢な設定は思いも及びません。

私は時々、目を閉じて聴こえてくる音に専念しようと思いました。音自体にゆられるような、そんな浮遊感覚を楽しむために。しかし、その試みはたびたび頓挫しました。プログラムに書かれた端唄、小唄、創作の歌詞は味わい深く、つい読み進めて想像は留まるころがありません。日本語を母国語として育った事を改めてうれしく思いました。そしてホロンさん制作の水の中のような映像と、唄の文句がちりばめられた布咏さんのお着物は、目にも楽しいものでした。

映像や衣装は、繰り返し可能で触れる事が出来る別の次元の創作であり、邦楽の演奏という、一夜限りの、粋を極めた芸術と対照の位置取りに見えます。その意外な組み合わせが布咏さんのスタイルなのですね。

音は空気(物理的、心理的な)の振動。他の日の夜の空気の中では音色は違って聴こえるでしょう。そしてアーティストも進化し続け、二度と同じ音楽を聴く事はないのですね。

一期一会。心に残る楽曲との貴重な出会いをあらがうように思います。



「世界青年の船」事業に参加して

沢田 直美

一月十七日から三月三日まで、内閣府主催の「第二十一回世界青年の船」事業に参加してきました。この事業は、日本青年と世界各国の青年との幅広い交流を図るため、明治百年記念事業の一として昭和四十二年度から昭和六十二年年度まで延べ二十一回にわたって実施された「青年の船」事業を発展的に改組し、昭和六十二年年度に発足したものです。前身の「青年の船」から辿ると、四十二年にも渡って続けられているロングラン事業です。

主たる目的は、日本と世界各国の青年が、「世界青年の船」に乗船して、生活を共にし、船内及び訪問国において、世界的視点に立った共通の課題の研究・討論を行うなど各種の多国籍間交流活動を行うものである、とされています。わたしは、この事業について学生のとき知り、以降ずっと参加したいと願ってきました。この事業の魅力は、本事業への参加のみならず、参加後は四十二年に渡る「青年の船」OB会に入会することになり、その後モホロンティア等で地域の国際交流活動に参加することができることです。日本に留まらない広い視野を持ちたいと思っていたわたしにとって、この特典は見逃すことのできないものでした。

出港日である一月二十日に横浜の大桟橋で見た「っぽん丸」は堂々としてとても素敵で、旅の舞台に相応しいものでした。その感激はとても言い表せません！参加青年は出港式をドルフィンホールと名付けられた大きなホールで迎えました。天井には大きなシャンテリア。照明設備も音響設備も整った施設に驚きました。日本政府によって選出された日本人百八名と十二カ国から百四十名の参加青年、内閣府や財団法人からのスタッフ、船のクルー、総数四百名ほどが四十日間の航海に出帆しました。

旅の目的は、青年たちの異文化交流です。ティスカッションや各国の文化紹介などの公式プログラム以外に、参加青年たちの自主企画として文化体験やビデオ上映の機会が用意され、連日に渡って催し物が開かれています。

そんな催し物のひとつとして、布咏師匠のDVD「唄」を、船内のラウンジで上映しました。ラウンジは、三味線

音楽を聴くのに最適なしつとりとした静かな環境とは言えませんが、ミッドシップバーを併設し、ピアノが置いてあるとてもムーティな雰囲気を持っています。ソファアに腰掛けたままくすくすい音楽を聴いてもらえるスペースとして、船内の施設の中からラウンジを選びました。多くの青年がさまざまな場所でそれぞれのイベントを開催しようとしている中、競うように場所と時間の予約を入れませんでした。

当日は、ペルー、ベネズエラ、カナダ、エジプトなど三十名余りの青年がラウンジに集い、あわただしい事業の中でほっと一息つける時間を共有できたように思います。外国人青年たちにも愉しんでもらえたようで、とてもよい経験ができました。

また、どのような楽器で演奏しているのかを知ってもらいたいと思い、三味線も外国人青年たちに触ってもらいました。フレットがない不思議な構造に大変興味を持たれ、また楽譜についても数字の意味などについて聞かれました。ある程度は説明ができたと思うのですが、私の英語力と稽古年数では、布咏師匠のところで教わっている「三味線の音に耳を澄ませることは、自分の内なる心を知ることである」ということや、「望遠」の心について、説明することは大変難しく、心残りです。

この度の航海では、日本文化の奥深さを再度認識するよい機会でした。この経験を踏まえこれからも自分の学びをもっと高め、これからも国際交流の場にて三味線音楽を啓蒙していきたいと思えます。わたしにDVDをご提供くださり、事業の中で上映する機会を与えて下さった布咏師匠、本当にどうもありがとうございました！

揚琴と三味線に遊んだ夏の一夜

福岡 俊弘

「揚琴、聴きに行きませんか?」「ヤン……キン……ですか?」

文楽・三味線奏者の鶴澤清志郎さんからお誘いを受けたのは、紫陽花の花びらがまだ色付く前の五月半ばのことだった。話はその一週間前に遡る。とある会合でのご縁が下で、自分がパーソナリティーを務めるラジオ番組のゲ

ストとして、清志郎さんにご出演いただいた。三十分ほどのトーク番組なのだが、そのときはスタジオにご自分の三味線を持参いただき、マイクの前で、に曲ほど演奏してもらったりもした。

超間近で聴く太棹の音は、身体全体を揺さぶるほどの迫力で、特に一の糸の響きは、全身を「蹂躪」されたような、それほどの圧倒感があった。なるほど、有吉佐和子はこの音に痺れて、焦がれて、「蹂躪」されて、「一の糸」を著わしたに違いないと思っただ。

ともかくもそのような形で、文楽・三味線弾きの若手ホープとして売り出し中の鶴澤清志郎さんとの縁は深まっていたのである。ちなみに清志郎という名前、今年、世界されたミュージシャンの忌野清志郎さんと同じ。でも、鶴澤さんのほうは「せいじろう」と読む。

さて、揚琴の話に戻ろう。その清志郎さんから携帯電話で冒頭のような連絡があった。「凄くいいです」「中国の楽器で」「めっちゃ好きなんです」「あ、神楽笛吹く女の子も来ます」「……線り出されるお誘いの言葉」「は、はあ」と間抜けな返事をひたすら返すワタクシ。

五月の文楽は、東京・国立劇場での公演となる。文楽座は上方・大阪が本拠地で、大夫、三味線、人形遣い、それに床山さんをはじめとする裏方も、全員が関西に住んでいる。なので、東京公演は、彼らにとっては基本的に地方巡業、つまりドサ回りだったりする。早い話、この期間は、みんな家族の下を離れてノビノビしているというか、遊んでいるというか(笑)。

その日の公演を終えた清志郎さんと三軒茶屋で待ち合わせをした。ここから今も昭和のレトロ感を残す世田谷線に乗って、四、五駅。さらに静かな住宅街を五分ほど歩いたところに、日本の伝統楽器を研究されている茂手木先生のお邸がある。そこがこの日の会場。

二十畳はゆうにある広いリビングにお邪魔すると、部屋中央にはすでにビールやおつまみの小皿がぎっしりと並べられたテーブル。壁沿いにぎっしり並ぶのは、茂手木先生が収集された日本の楽器の数々。笙や鼓などのほか、見たこともない打楽器が無数にある。そして、部屋の片側にどんと置かれた本日の主役、揚琴。

揚琴は、中国の伝統楽器で、百五十本近くのスティールの弦を、二本の竹のスティックで木琴のように叩いて音を出す。中

国語では、Yang-Chin と発音する。

この揚琴を演奏するのは中国人の金重軍(きんあづま)さん。床に敷かれた座布団の上に、全員がべたりと座り、いよいよ揚琴の演奏の開始。ふとまわりを見ると、10人以上が集まっている。彼らはみんな文楽の、三味線弾き、大夫、人形遣いの方々。つまり、音楽のシロートは自分だけだということに気づく。汗。どうしよう、このあと音楽の深い話になったり……。と、そんなことを心配しているときに、揚琴の最初の音。えっ、ええー？心臓を鷲つかみ取るような切ない音色は何？曲は「おくら」。が、「おくら」聴いた「おくら」とは、明らかに哀愁のシイヤーが違つ。多感にして流麗、多情にして華麗。響きからしてすでに泣いているし、鳴いている。驚愕。瞬時にその音に、その演奏に魅せられた。

演奏後は、参加者から金さんへ質問攻め。揚琴もちよっと弾かせてもらったり。そうこうしているうちに、料理とお酒が次々と運び込まれ、そのまま宴会へと突入。けっこう酔いもまわってきたところで、金さんが竹のスティックを持って、再び揚琴の前へ。今度の曲はサイモン&ガーファマンクルの「スカボロ・フェア」。全員が箸を休め、お酒を口にするのも忘れて、聴き入った五分ほどの濃密な時間。気がつく、涙をほらはらとこぼしている自分がいた。続いて「荒城の月」。ベルギーにおいては賛美歌にもなったという、滝廉太郎によるその美しい旋律は、優さの情景を細長い糸のように語る。胸を突かれ、心を打たれ。フォルティシモのトシモロから、テクレシエンドでのフィナーレ……、シエネラルパウゼ。ふう。全身が感動していた。その場に入たりこんで動けないくらい。

宴はこのあとと続き、なぜだか誰かが太棹三味線を取り出し、即興の演奏会が始まる。さらにそこに鼓弓が加わる。料理は尽きず、酒も尽きず。このまま寝入って朝起きてみたら野原のと真ん中、みたいな昔話があったつような(笑)。そんな楽しくて不思議な一夜。

揚琴の音に遊びし夏の夜は、三味線の糸がつかないだえんかいな。



《今後の公演他予定》

七月廿六日(日)

第二回 薊の会

フアトの孤愁・江戸唄の夢

八月九日(日)

第二回 粋艶会浴衣をらす

十月五日(日)

旗亭美乃吉 美乃吉会

舞と唄の夕べ

十月廿四日(土)

第三十九回 美紗の会のこと

十一月八日(日)

高島屋文化サロン

江戸の粋

催物の詳細は美紗の会ホームページをご覧ください

<http://www.17.ocn.ne.jp/~misa5/>

■たより第603号

発行者 美紗の会

編集責任者 大久保 朋子

■美紗の会

主宰 西松 布詠

稽古場 港区白金台三二二二

白金台プレイス三階

電話 (三四四一) 二七二六

(五四四七) 二四二二

E_mail : nfu@solel.ocn.ne.jp